



水の文化書誌 ⑤ 《京都の水》

「やがて山紫水明という言葉が感覚的にびつたりするようになる頃に平安京という都がこの盆地に出現した。今から千二百年ほどの前のことである。建設の指令者である桓武天皇は自分の理想とする土地を発見してさぞ満足をおぼえたことだろう。山容の美はさりながら大勢の人間を養うだけの水が豊富にあったからである」と、田中阿里子は浅野喜市写真集『四季京の川』（京都書院、1987年）に書きとめている。

京都は北東に鴨川、東に白川、西に桂川が流れ、やがて淀川に合流する。中央部には無尽蔵ともいわれる地下水が存し、至る所で名水が湧き出す。さらには明治23年、第一次琵琶湖疏水、明治45年、第二次琵琶湖疏水の通水がなされた。これらの水が京都の人々と文化と生活を支えてきている。

2003年3月20日、第3回世界水フォーラム京都国際会館の会場で、私はケニアの人から「ジヤパン・グレイト・ネーション、ビュートイフル・キョウト」と話しかけられた。春の陽ざしを受けて京都は瑞々しく輝いていた。ケニアの人を魅了する京都の水景美について、橋本健次・写真川端洋之・文『京都水景色』、水野克比古・写真『京都雨景』、横山健蔵・写真『京都鴨川』の写真集が1997年に光村推古書院から出版されている。

名水については、京都新聞出版センター編・発行『名水を訪ねて京都・滋賀・健康ウォーク』（2001年）がわかりやすい。染井（梨木神社）、桐原水（宇治上神社）等の名水を散策できるようにしている。

駒敏郎著『京洛名水めぐり』（本阿弥書店、1993年）では、北野天満宮の太閤井戸、御神用水、三斎井戸をはじめ江戸時代文献が丹念に考証されており、巻末には江戸時代の名水一覽も掲げられている。

京都に多くの名水が湧き出る所以は、豊富な地

下水盆地が存在するからである。この水盆を科学的に検証したのが、NHK「アジア古都物語」プロジェクト編『京都千年の水脈』（日本放送出版協会、2002年）である。その中で、関西大学工学部楠見晴重教授は「京都盆地の地下の砂礫層に存在する地下水の量を211億トン、琵琶湖の貯水量である約275億トンに匹敵する数値である」と解析されていることには驚く。

京都の地下水は「金気」が少ないため、この豊富な水が多種多様な水の文化を育んできた。京都新聞社編・発行『京都いのちの水』（1983年）、平野圭祐著『京都水ものがたり』（淡交社、2003年）、鈴木康久・大滝裕一・平野圭祐編著『もつと知りたい！水の都京都』（人文書院、2003年）には、納涼床、友禅染、生麩、湯葉、豆腐、京野菜、茶の湯が取り上げられ、さらには水の神を祀る貴船神社、空海にまつわる雨乞い伝承、そして京の街づくりや堀川の人工河川が果たしてきた役割の変遷についても論じられている。

「川はそれによって生きるわれわれ人間にとっていのちである。運命である。文化である」と書き始める岡部伊都子・文、木村恵一・写真『京の川』（講談社、1976年）は鴨川、高野川、大堰川、清滝川、山科川等を秘やかに訪ね歩いた名随筆である。

森谷尅久、山田光二著『京の川』（角川書店、1980年）は、京文化の源である鴨川、王朝詩文の舞台桂川、桜の仁和寺、芸能の里御室川、高僧たちの精神を伝える清滝川、京都復興の礎である疎水を歴史的に捉えている。

吉井勇は「かにかくに祇園は恋し寝るときも枕の下を水ながる」と詠んでいるが、河野仁昭著『京の川』（白川書院、2000年）では、水上勉『京都暮色』（桂川）、川端康成『古都』（清滝川）、夏目漱石『虞美人草』（高野川）等の小説を引用しながら、京の川は文字を生み出すと評している。

琵琶湖疏水を建設した土木工学者・田辺朔郎の



